

わがむらの昔ばなし

みすみのことわざ

文化財専門委員 齊藤元宣

- 「三隅町の歴史と民俗」が町制三十周年記念に出版されて十一年になる。当時実質的に編集にたずさわられた徳見光三、伊木孝夫、中野四郎、香月泰男の各氏はすべて故人になられ、今では生存者は私人になった。
- 其時収集した「ことわざ」や其後教えて下さった故老も大体鬼籍に入られた。
- 一部本の重複も含めて町内の俚諺(ことわざ)を順不同で列記する。
- 節分にこんにやくを喰べると体内の砂がとれる
- 渋柿を喰うと尻がつまる
- 土用うなぎは薬になる
- 冬至には豆腐をたべるもの
- 男やもめに蛆がわき、女やもめに花が咲く
- 日が照って居るのに雨が降ると孤の嫁入りがある
- 晩に火遊びするとごりを押しごりを押すと寝小便した様に着物の裾のしめるを言う
- 眼疔を落すには「小豆かと思ったら眼疔であった」と
- いって小豆を井戸へ落すと眼疔がなくなる
- 春蛇を先に見ると其年は怠ける事が多いが、とかげを先に見ると其年は多忙である
- 一瓜種に二丸顔三番垂類四長面五迄下って杓子面
- 暗夜の欠け徳利口からじゃぶじゃぶ放題
- ばたばた騒ぐな鶏は既じゃ
- 牛の尻に茶碗をついだ様な似合わせ
- 算用合って金足らん
- あなたの事なら柚の木へさかさにでも登る
- 中村の弘法様で上り物(喰べ物)がえい
- 日暮の山道や一気がもめる(又忙しい)
- 蒲鉾と喧嘩は耳へかかれ
- 味噌桶が出れば雨が降る(内)のみ居る物はたまたま他出する時にいう
- 雨降りの太鼓で鳴りが悪い
- 犬のちんちん出してかしまる
- 大根は十月の闇に太る
- 女さがしうして牛を売りそ

- こねる
- 密柑・金柑わしやすかん、親のいう事なほきかん
- 鉄砲玉で行ったぎり
- 火は大名に焚かせ、餅はげすに焼かせ(火焚は静かなもの、餅焼は騒々しいもの)
- 梅雨の天気と、ゆうどう(癩病)は赤く(明く)なる程悪い
- 怪気喧嘩は犬も喰わぬ(夫婦喧嘩は犬も喰わぬ)
- 鶏の宵鳴きは火難のたたり
- 鷲と客は立場が大事
- 八月の風でそば(蕎麦)迷惑
- 上手の手から水が漏る
- 鼻が鳴けば明日は天気
- 鼻は「糊つけほうせ」と鳴く
- 尻は言い出し
- 猿が火事見舞に行った様な(赤い顔を野次る)
- 春の日で暮(呉)れそんで暮(呉)れん
- 人の牛蒡で法事をする
- 親の物は子の物、子のものはおれのもの
- ある様でないは金



俳句

清風句会

六月例会

(順不同)

- 山野たけ子 田植すみ小さき幸に心足り
- 峠越え卯の花肩に風匂ふ
- 山中 重女 一家族風邪が尾を引く梅雨の入り
- 梅雨の入り口中にがき胃のくすり
- 岡 松月 田植機の向き変へかけて話をする
- 川もまた田植濁りや昨日今日
- 宮永ミネ子 疲れ目の届く所に夕あやめ
- 田植すみ水に心を通はせて
- 仁保 民子 さわやかな水に写してあやめ咲き
- 入梅にかすみて見えるほかけ舟
- 齊藤 元 上げ潮を梅雨の濁りが押し流る
- 梅雨ふかし花外の句碑は寺に寂び
- 上田 雪子 小雨降る紫こぼすあやめかな
- 生花やあやめ艶やか客迎ふ
- 藤木 常 泥足をまた叱られる梅雨の犬
- 山崎 菊女 花あやめ激しき雨や禪の寺
- 鯉はねる水面にゆらぐ花あやめ
- 池田ヒサ子 田植機の青一直線に植え進む
- 吾老いぬ語る人なき苑の春
- 早乙女や泥手のまゝに海苔むすび
- 田村 九重 満緑に白足袋の女浜離宮
- 浅蜷搔く嫁ヶ島松借景に
- 大深 八重 大欠伸縁の下から梅雨の犬
- 入梅や亡夫の地下足袋朝の草
- 竹内 奈美 春の旅湖底に映る夜のネオン
- 追憶も遠し菅笠田植歌
- 因藤 兎史 (東行庵主) 法燈を守り六十年
- 花あやめ
- 紫の花をくれたり梅雨の人
- 笹見 梅雪 片手間の一町作の田植かな
- 晋作の菩提串うあやめ桶
- 古き郷細き流れに咲くあやめ
- 梅雨の夜や妊る嫁は鶴折りて
- 選者 追吟
- 永田 石山 開きそむあやめの園を小糠雨
- 青き踏む穴道湖畔や文学碑
- 安藤 芳江 今年また花数増えし黒百合はさ
- いはて剣路の丘の思ひ出
- 平川 育子 チルチルとミチル呼ぶごと葦切

短歌

三隅短歌会

六月作品